B1

私の部屋の窓の風景

十和田市立南小学校六年　沼沢　美羽

私の家のまわりには、一面田んぼが広がっています。米作りを通して、一年中いろいろなけしきを楽しむことができます。

春、田植えの季節です。冬の間にかたくなった土を、トラクターでたがやします。

「春になったよ。おきて。」と、いっているような気がします。土の中でねむっていたカエルも、目を覚まし、そのカエルをねらって、たくさんのからす達が飛んで来ます。そして、トラクターを先頭に、からすたちが一列にならんで付いて行くのです。まるで、運動会の入場行進に見えてきて、私まで体が動いてしまいそうです。カエルの合唱と共に田植えが始まり、田んぼ一面が若草色に変わります。それが大きく育ち稲穂が出始めるころには、赤とんぼやギンヤンマの姿を見ることができます。そして、若草色だった一面が小金色の稲穂に変わり、たれ落ちそうになると、十五

夜のお月様と共にすずしさがもどってきます。

秋、緑のくきや雑草が育って、稲穂が黄色くなったら、いよいよしゅうかくです。重そうに実をつけた稲穂が低くたれ下がり、今かかとしゅうかくを待っています。コンバインが手ぎわよく稲をかりとると、何とも言えない、いい香りがします。そうしてかりとられた稲はせい米され、お米へと変身するのです。

冬、田んぼには何もなくなります。でも、

—

さみしさはありません。ネコやキジが走り回り、ハトやすずめもおり立ちます。雪がふれば、ふわふわのかき氷。それと、米づくりの作業をしていた人達が、手をふってくれた時のうれしさや喜びの気持ちが残っています。冬の間も、田んぼはいろいろな表情を見せてくれます。

田んぼは、稲やたくさんの生き物と共に生きています。毎年おいしいお米が食べられることに感謝して、これからもずっとこの風景

が続くことを心から願っています。

私も米の稲かりをしたことがあります。これは私が小学三年生のころの話です。私は、ひいおばあちゃんと、稲かり体験をしに、バスで黒石にむかいました。集合場所の田んぼには、たくさんの人がいました。くばられたかまで、稲をかろうとした時、指導の先生が、「稲を左手でつかんで、かまで稲をかる方が手ぎわよく、かることができる」ということを教えてくださいました。こんなに暑い中でも米づくりをする大変さを知ることができました。だから、お米を食べるときには、お米をつくってくださる人達のことを思いうかべながら、おいしくいただこうと思います。